

2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2025/8/31

団体名	NPO法人ホールアース自然学校		活動タイトル	希少植物の生息適地管理と、地域内外のキーマンを包括した持続可能な保全体制構築	
	活動対象地域における生物多様性の保全に関する現状と課題			■活動風景	
* 保全に関する現状 ・保全に主体的に関わっている団体：平成25年より当該団体が主体となり、保全管理（下草刈り・落葉搔き・倒木除去）、個体数調査、盗掘巡回等を年20回程実施（1年目の助成により活動数が5回程増加、個体数調査も開花個体に加えて未開花個体や結実個体まで調査を実施） ・保全状況：保全当初は数十株程度だったが、上記活動及び昨年度の活動により令和5年度時点まで約300個体程まで増加 ・盗掘：無断で敷地内に侵入し盗掘する例が毎年10-20株程度発生（今年度は2/29時点で0株）			該当地での調査 データロガー等を用い、微細な記録や現地ならではのデータ取得に挑戦した		
* 保全に関する課題 1.さらに科学的で継続的なデータの不足：昨年度の助成により新たな情報が取得できたものの、他の要因やそれらの経年変化を見ていかなければ、依然としてこの種の生育状況や最適環境が何かが把握しきれない 2.地域内外のキーマン人材の不足：昨年度の助成により新たなメンバーが加入した一方で、関係すべきキーマン人材の関わりがまだ不十分 3.人為的盗掘や動物による掘り起こし：昨年度の助成により個体数が維持できている一方で、人為的に監視する体制に限界がある					
<p>■活動報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ●専門家とのさらなる科学的調査・分析 →該当種の生育に関連しそうな情報をについて、追加での調査を実施した。併せて、該当種のさらなる生活環の把握を目指し、開花期のみならず結実期とその後まで追加での調査を実施した。 ●保全管理計画の立案 →昨年度の調査、また上記の追加の調査で得たデータや知見を踏まえつつ、引き続き保全管理に関する主体が使いやすい、血の通った計画づくりを模索した。 ●キーマンを集めた保全体制づくり →昨年度に引き続き特定少数のメンバーと密なコミュニケーションをとり、顔が見える範囲でありながら、持続可能な保全を行なつていただける規模感での体制構築をめざした。 ●デジタルツールを用いた保全管理 →人だけでは限界のある監視に対し、自動撮影カメラなどを用いた非人為的な監視体制も併せて実施し、盗掘の抑止や被害状況の把握につとめた。 	<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●専門家とのさらなる科学的調査・分析 <ul style="list-style-type: none"> ①目標アウトプットに対する達成状況 ・時期のずれ（関係者の予定や該当種の生育状況などが理由）があったものの、計画通り年間で5回を実施することができた。 ②目標アウトカムに対する達成状況 ・開花期の開花数に加え、結実期の種子散布状況の様子に関するデータを得られた。 ●保全管理計画の立案 ①目標アウトプットに対する達成状況 ・追加調査を実施した分も含め、実効性かつ加筆修正の余地を残すような形で一定の形に収めることができた。 ②目標アウトカムに対する達成状況 ・「この計画をもとに、これまで以上に該当種に即した保全管理を行いたい」とのお言葉を保護の会の方々からいただくことができた。 ●キーマンを集めた保全体制づくり ①目標アウトプットに対する達成状況 ・時期のずれや参加者の都合による出欠の差、場所の変更等があったものの、計画通り年間で3回実施することができた。 ②目標アウトカムに対する達成状況 ・概ね予定していた方々の参加があったことはもちろん、とりわけ県の協力体制や関心度を大きく高めることができた。（本活動体制について、県内の他自生地保全団体へ紹介していただき、意見交換をする場が生まれた） ●デジタルツールを用いた保全管理 ①目標アウトプットに対する達成状況 ・購入させていただいた3台に加え、県の遠隔監視カメラ3台と併せ、合計6台での監視を行うことができた。 ②目標アウトカムに対する達成状況 ・盗掘と思われる株が0株であり、また盗掘と思われる人物の映像も映っていないかった。 	<p>2年間の成果共有会 専門家から「データから見えること」のまとめを発表してもらった上で、今後のさらなる保全への課題や可能性を議論した</p> 			
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p> <ul style="list-style-type: none"> ●開花期以外、対象種以外の調査による関連データの収集 →「対象種の開花」というメインの調査項目に加え、対象種以外も含めた時期を変えての調査を行うことで、結果的に対象種に関する新たな視点や気づき（結実期の様子や割合、対象種以外の植物の開花状況や個体数など）を得ることができた。 ●「現場」で話し合うことの重要性 →膝を突き合わせ室内で改まる会議も重要だが、関係者全員で現場にて現地を見ながら雑談も含めて話すことでも、関係性の構築や必要事項の議論を深める上で効果的に機能することがわかった。 ●行政の担当者異動に対する地域側の対応方法 →行政側の性質を事前に理解し、現地に関する詳細な情報や関係性を構築しておくことで、行政担当者の異動があっても、地域側が主体的に効果的なコミュニケーションを取れることが分かった。 	<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ●専門家とのさらなる科学的調査・分析 →これまでと比べて確実に聖地で幅広いデータが取得できたが、専門家が常に現場に張り付いて調査できるわけではないため、地域保全団体や私たちが同程度の質を保った調査を行える必要性を感じた。 ●保全管理計画の立案 →「この場所のこの種」に限定した計画も大事だが、そこから他地域で応用するという視点を持つことも大切だと感じた。 ●キーマンを集めた保全体制づくり →2年間の助成事業で、地域内外のキーマンとの関係性は十分に構築できた。しかし、保全活動の主体を当団体から地域の実施者へバトンタッチしていくことは容易ではない。今後は、丁寧なコミュニケーションを重ねつつ、役割を徐々に移していくプロセスの必要性がある。 ●デジタルツールを用いた保全管理 →デジタルツールは便利である一方で、完全に機械任せになると頻繁な確認を怠った際の未作動や誤作動などのリスクがあることが分かった。 	<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p> <table border="1"> <tr> <td>この1年間の活動を通じて</td> <td> ①該当種に関する科学的な調査データの取得 ②必要なステークホルダーが最小限で最適な形で関わる保全管理体制の構築 ③デジタルツールも活用した保全方法の施行 </td> <td>を達成しました。</td> </tr> </table> <p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象とする希少種 →昨年にも増して、保全管理の方法の検討を行ったことにより、開花数の増加が続いている。 ・保全に際しキーとなる人材 →「長年やってきて気つかなかった視点や発見を、この2年で多く得ることができた」「徐々にバトンタッチしていく可能性を感じほつとしているとともに益々頑張っていきたい」「さらなる疑問が湧いてきたのであらたな調査にも挑戦したい」等の声が聞かれた。 	この1年間の活動を通じて	①該当種に関する科学的な調査データの取得 ②必要なステークホルダーが最小限で最適な形で関わる保全管理体制の構築 ③デジタルツールも活用した保全方法の施行	を達成しました。
この1年間の活動を通じて	①該当種に関する科学的な調査データの取得 ②必要なステークホルダーが最小限で最適な形で関わる保全管理体制の構築 ③デジタルツールも活用した保全方法の施行	を達成しました。			